

[要旨]

3.11以後における「脱原発運動」の多様性と重層性 ——福島第一原発事故後の全国市民団体調査の結果から——

町村 敬志
佐藤 圭一
辰巳 智行
菰田レエ也
金 知榮
金 善美
陳 威志

2011年の福島第一原発事故以降、日本では原発をめぐる市民の幅広い運動が全国規模で急激に発生してきた。運動を支えたのはどのような主体か。活動はどのような時間的・空間的広がりをもっていたのか。個別事例の紹介はあったものの、運動の全体像を全国規模で調査に基づき検証する試みはまれであった。筆者らは、福島第一原発事故以降、原発・エネルギー問題に何らかの形で取り組んだ市民活動団体を対象とする全国規模の質問紙調査を2013年2～3月に実施した(送付数904、回収数326、回収率36.1%)。これに加え、全国でインタビュー調査を実施した。その結果、次の点が明らかとなった。第1に、「脱原発運動」としばしば一括される運動のなかにはきわめて多様な団体による活動が含まれていた。第2に、これら団体の活動内容や原発への態度には、結成時期、事務所の所在地(とくに福島第一原発からの距離)、成員の属性、そして運動文化などに基づく、分岐が実際には存在していた。第3に、そうした差異を伴いながら、異なる団体の間には共通課題の優先設定や対立点の回避など一体性の維持に向けたさまざまな回路が用意されていた。要約すると、異なる取り組み方を持つ団体が共存することによって原発・エネルギーに関わる諸課題には新たな接続が生まれ、そのことが今回の脱原発運動に対して、全国的規模で長期間活動を持続することを可能にする多様で重層的な基盤を用意した。